

聖書：コリント人への手紙第一 1：26～31

説教題：誇る者は主を誇れ

日時：2022年1月23日（朝拝）

今見ている I コリント 1～4 章はコリント教会で生じていた分派の問題を扱っています。1 章 12 節で見ましたように、コリントのクリスチャンたちは「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と言って互いに争っていました。そんな彼らにパウロは、彼らがそのようにもめているのは神の知恵よりこの世の知恵あるいはこの世の価値観を重んじているからだと言っています。コリントはギリシャの大都市でした。ギリシャ世界では知識や知恵、雄弁術が高く評価され、もてはやされていました。そういう周りの文化、価値観に影響されてでしょう。コリント教会では誰をリーダーに推すかを巡って、教会の中にいくつもの党が現れる状況となっていました。そんな彼らにパウロは神の知恵はこの世の知恵と大いに異なること、それは福音の中心である十字架にはっきり表されていることを前回述べました。この世は十字架をどう見るでしょうか。この世の知恵は十字架を愚かと見ます。23 節にあった通り、ユダヤ人にとってはつまずき、ギリシア人にとっては愚かです。しかし救いへ召された者たちにとっては、十字架のキリストは神の力、神の知恵であると言われました。見方が丸っきり反対です。ですからこの世の知恵を受け入れ、そこに立って誇ることは、神とは全く違う道を行くことになります。神の知恵はこの世の知恵、この世の価値観をひっくり返すものです。神の知恵がそういうものであることは、その働きの実であるコリント教会の構成員を考えてみても分かるというのが今日の箇所のポイントです。

パウロは 26 節で「兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい」と言います。この「召し」とは救いへの召しのことです。自分たちがどういうところから救われたかをもう一度考えてみなさい、と。そして言います。「人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。」 「知者」とは知識や知恵を持っている知的に優れた人のこと。「力ある者」は第 3 版までは「権力者」と訳されていました。つまり社会で権力を持つ人、政治的な力を持っている人たちのことでしょう。そして「身分の高い者」とは、生まれの良い者、経済的に裕福な者、いわば上流階級の人です。こういう人たちがコリント教会に全くいなかったわけではありません。この章の 14 節にクリスポとガイオという人が出て来ましたが、前

に見ましたように、クリスポはコリントの会堂司だった人で、ユダヤ人社会で責任ある立場にあった人でした。またガイオについてはコリントで執筆されたローマ人への手紙 16 章 23 節に「私と教会全体の家主」と出て来ます。つまり彼は多くの人に宿を提供できた裕福な人だったことが伺えます。また同じローマ書 16 章 23 節に「市の会計係エラスト」と出て来ます。第 3 版では「市の収入役」と訳されていました。そのような町の役人もコリント教会のメンバーでした。ですから社会的に高い地位にある人たちが全くいなかったわけではないのです。ただ「多くない」と言われています。全体としては、そうでない人たちの方が多かった。それはどんな人たちだったかが 27～28 節に記されています。それはこの世の愚かな者、この世の弱者、この世の取るに足りない者や見下されている者、無に等しい者です。つまり社会であまり認められていない人たち、重要であるとは思われていない人たち、むしろ弱者と見られている人たち、注目に値せず、いや一瞥にも値しない人々。無に等しいと言われるに至っては、いてもいなくても関係ないと見られているということです。その存在をほとんど無視されているような人々。そういう者たちであることを思い起こさせています。ある意味で、このことを思い出すだけでも彼らが今、互いに誇っているのはおかしいということになります。もともとこの世の価値観に立って誇れる何かを持つ者たちではありませんでした。なのにどうして今クリスチャンになって、何者かになったつもりになり、思い上がって争い合っているのか。それは自分たちの召しを良く考えてみるならチグハグではないかということです。

しかしパウロの関心は以前の彼らの状態を思い起こさせて彼らを辱めることではなく、神の知恵がいかにかこの世の知恵と異なっているかを示すことにあります。当時の教会は人間的に見れば、知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありませんでした。むしろこの世の愚かな者、この世の弱者たちが中心でした。これはたまたまそういう結果になったということなののでしょうか。偶然なののでしょうか。あるいはこれはコリント教会に見られた特殊な例だったのでしょうか。そういうことではありません。ここには神の知恵と深い関係のある神の意図があると言われています。27 節に神は「知恵ある者を恥じ入らせるために」とか「強い者を恥じ入らせるために」と言われています。28 節にも「有るものを無いものとするために」と言われています。「～するために」という言い方には神の明確な目的が示されています。もちろんこれは神は知恵ある人や力ある人、身分の高い人がお嫌いであるとか、そういう人たちにそのことだけで敵対しているという意味ではありません。しかしそ

うではない人たちの方が多く救われることの内に神は明確なメッセージを語っておられるのです。

身分の高い人、社会的な地位を持つ人、裕福な人、学識のある人たちは、一般的にこう考えがちではないでしょうか。自分たちは重要な人間、価値ある人間として、何事においても当然、他の人々に勝って優先され、あるいは優遇されるべきである。その特別な権利を私たちは有している。ところが神はそうでない人たちを多く救っています。この世で弱く、愚かで、無に等しい人たちがむしろ優先的に救われています。これを見て、まず面白くない！と思うのです。なぜ私たちが先ではないのかと思うのです。これはイエス様の時代もそうでした。取税人や罪人たちの方がイエス様に近づき、イエス様と交わり、救いに入って行きました。パリサイ人や律法学者たちは、自分たちが先に重んじられ、イエス様に認められ、高く評価され、神の国の祝福に入れられるのが当然の事の進み方だと思っていたのに、そうでない。イエス様は彼らに言いました。「まことに、あなたがたに言います。取税人たちや遊女たちが、あなたがたより先に神の国に入ります。」 このように扱われて彼らは恥じ入らされるのです。自分たちが当然こうあるべきだと考える仕方自分たちが扱ってもらえないことに面食らってしまう。自分たちが期待した通りにイエス様あるいは神が動いてくれないことによって、恥じ入らされるのです。そしてこれはその時だけのことではなく、終末的な意味も持っています。これは神が最後の日にもこの基準で世界へのさばきを行うよ！ということの前触れなのです。反対から言えば、この世の知恵、この世の価値観は結局最後の日に通用しないよ！それらはいずれ投げ捨てられるよ！ということを予告しています。この神の基準が示されることによって、この世の価値観に立って自分は知恵ある者であると誇っている人たち、強い者であると誇っている人たちは恥じ入らされるのです。

もちろんこの世界に見られる様々な知恵ある人々の知恵そのものが、それ自体で悪であるわけではありません。すべての人間は神のかたちに造られていて、そこには神を映し出す光があると聖書は語ります。信者・不信者に関わらず、そこには優れた輝きがあります。それは神が今もなお恵みをもってこの世界に関わっていてくださるしるしです。しかしそのような優れた知恵や才能がその人に見られるからということで、その人が救われるわけではない。あるいはこの世で高い地位につき、人々が賞賛する多くの業績を成し遂げたからと言って、それで神の前で救われるわけではない。なぜ

ならずすべての人は神の前に罪人だからです。あらゆる部分に罪の染みが行き渡っていて、人間の間で最高と思われる人でさえ、その考えや言葉や行動のあらゆる部分に罪の染みがあり、聖なる神の前ではいわば悪臭を放っているからです。ですから神は、28 節に「有るものを無いものとするために」とありますように、この世で自分を誇っている人たち、自分は有用な人間であると自負している人たちをほとんど無視するようにして、そうではない人たちを救っておられるのです。それは救いにおいては、そういうこの世の知識や権力、地位は関係ない、それらがその人を救う基準ではないということをはっきり示すためです。

29 節に「肉なる者がだれも神の御前で誇ることをしないようにするためです」とあります。どんなに誰かが自分を誇っても人間はしよせん「肉なる者」と表現されるようなものでしかありません。そんな肉なる私たちがそのまま神に自分は認められると考えて神に近づくことはできません。言うまでもなく、身分の低い人たちもそうです。もしかするとある人たちは今日の御言葉を読んで、まるで自分たち低い身分にあることの方が有利であるかのように考えて、逆に自慢気な態度に出るかもしれませんが、それも誤りです。低い人はただ神のお恵みによって救っていただくのであり、彼らがすることは誇るのではなく、感謝することです。身分の高い人も自分の救いはこの世の知識や業績、地位の高さによるのでないことをわきまえ、ただ神の恵みにより頼んでへりくだるなら救われます。神の前では誰一人自分を主張できる人はおらず、みんな同じであり、平らです。1センチ、1ミリでも神の前で高い人、神にアピールできる人はいません。どの人にとっても救いはただキリストを通しての神の恵みにのみよるのです。

最後に 30 節以降でパウロはコリント人たちに与えられている祝福を肯定的に述べます。「しかし、あなたがたは神によってキリスト・イエスのうちにあります。」これは 1 章 9 節で述べられたことと同じです。1 章 9 節に「神に召されて、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられた」とありました。30 節でも「神によって」と言われています。つまり彼らの祝福はただ神の恵みによること、神から出たこと、神のおかげであるということが言われています。そしてイエス・キリストが再び神からの知恵と言われ、その中身が 3 つの言葉で言い表されています。一つ目は「義」。私たちは神の前で義を持つ者ではありませんでした。罪ある者としてさばきを受けるにふさわしい者でした。そんな私たちはキリストの十字架を通

して罪を赦され、キリストが勝ち取ってくださった義を神の前で持つ者とされました。これによって神に受け入れられ、神との正しい関係に生きる者とされました。そして最後のさばきからも守られます。2つ目は「聖」。これは1章2節に出て来ました。基本的な意味は聖別です。神へと取り分けられたことです。そのように「神のもの」へと聖め分かたれた私たちは、そのような者にふさわしく聖なる歩みに進むようにと命じられています。しかしその基礎はキリストにあって私たちはすでに聖なる者とされているということです。自分で聖なる者になるのではないのです。キリストと結ばれて、私たちは以前とは異なる「聖なる者」という状態に導き入れられていると聖書は語ります。そして3つ目は「贖い」。これは身代金を払って奴隷を買い戻すことを指す言葉です。以前の私たちは罪の奴隷またサタンの支配下にありました。そのがんじがらめの状態にあって自分を救い出すことができなかつた私たちのために、キリストはご自身のいのちという代価を払い、そこから私たちを救い出し、解放してくださいました。これは今現在導き入れられた霊的状态を表すとともに、将来の完全な救いの状態を指しても使われます。この完全な悪からの救出はキリストの十字架の身代わりを通して私たちに与えられる祝福です。

これらのことを考えたら私たちに残されているのは、もはや31節にある通り、「誇る者は主を誇れ」ということだけなのではないでしょうか。他に一体何を私たちは誇るべきでしょう。無に等しかつたコリント人たちは、神により、キリスト・イエスのうちにある者とされ、この豊かな救いに生かされる者たちとして歩んでいます。とするなら彼らが関心を注ぐべきは、どの人間のリーダーに私はついて、それによって自分を高く上げようかと互いに争うことではなく、ただキリストを見つめ、キリストに感謝し、キリストのみを誇りとする歩みをする事なのではないでしょうか。

これは当時の異教社会にあるコリント人たちにとって、ある意味で大きなチャレンジとなることだったと思います。周りの世は自分たちの素晴らしさを誇示し、互いに競っていました。知恵と知識を誇り、その話し方を誇り、それによって自分の名を上げ、高い地位を得ることを目標としていました。そんな中、彼らは世と調子を合わせて自分を誇る道を行くのではなく、ただ主を誇り、ただ主をたたえ、ただ主にのみ栄光を帰す生活へ進むようにと言われました。私たちも同じです。自分を良く考えれば、この世の愚かな者であり、弱い者であり、また取るに足りない者、見下されている者、無に等しい者です。そんな者を神はただキリストの十字架を通して救ってくださいま

した。これはただ神の恵み、神の憐みによることです。そんな私たちがもしいくらかでも自分を誇ろうとするなら、今見て来たこととアベコベになってしまいます。自分はどこから救われたのか、その召しのことが全然分かっていないということになってしまいます。私たちはもう一度自分の召しを振り返り、どこから救われたかを思い返し、神がその知恵により、与えてくださった救いを心から感謝し、御名を賛美する者でありたいと思います。「誇る者は主を誇れ」という聖書の御言葉に生きる者とされたいと思います。そして同じ救いをいただいた者たちとして、兄弟姉妹とこのことで心をつなげた教会生活を送り、その教会生活を通して、主にのみ栄光を帰す主の共同体の歩みへ導かれたいと思います。